［二〇一五年度大会シンポジウム］特集　思想史学の問い方――二つの日本思想史講座をふまえて

コメント：両講座における中世思想史研究の課題

森　新之介

評者は当日、末木文美士の報告を承けて四つの問題を提起した。ここでは第一の「思想史研究と時代」を省いて、残り三つの問題について略述する。

一、中世思想史研究は活発か

末木は、ぺりかん講座中世巻の「総論」で「近年の中世思想研究はきわめて進展が著しく、従来の常識はほぼ完全に転覆している」（二五～二六頁）と述べた。しかし評者は、中世思想史研究でそのような活況を実感できずにいる。平成十八年、本誌第三八号の「編集後記」は古代と中世の投稿論文について「減少傾向に歯止めがかからない」と警鐘を鳴らしており、本学会の大会でも研究発表は久しく低調である。中世研究などは現在、極めて危険な状況にあると考えられるが、両講座にそのような危機意識は見出されない。[1]

また同巻「総論」には、「中世思想のもっとも中核を形成する仏教」（二三頁）や「中世は武士の時代である」（二四頁）など、「従来の常識」を襲った表現も散見される。中世思想史で仏教や武士が重要であることは言うまでもないが、それらを中核や代表とするような通念は懐疑されるべきであろう。

研究状況の停滞は、両講座の構成にも影を落としていないか。末木が「多様な分野の研究者の協力」（報告

資料）と述べたように、隣接諸学からの寄稿が多い両講座は華やかである。しかしこれは、思想史学での中世研究が停滞しているため自給率が低下し、隣接諸学からの輸入に依存して成り立っているとも見得る。また、隣接諸学での思想研究は人物よりも集団や時代全体に着目し、哲学や教理への考察が不十分になり易いという嫌いがある。そのため両講座の中世研究は、哲学史や教理史から離れて文化史や精神史に傾き、思想史らしさをやや失っているかも知れない。

二、儀礼研究に死角はないか

末木は岩波講座第七巻『儀礼と創造――美と芸術の原初』の「「古典を読む」まえがき」で、「儀礼は一方で王権に関わり、他方で仏教と関わりながら、文学、芸能、音楽、美術、神道など、多方面にわたる総合的な展開を示している」（二九四頁）と述べた。では現在、その儀礼についての中世研究は十分多岐に展開しているのであろうか。

儀礼研究とは本来、聖俗すべての儀礼を対象にすべきものである。しかし近年の中世儀礼研究では、対象が法会などの宗教儀礼にほぼ限定され、年中行事などの世俗儀礼はほぼ除外されている。著書や論集などで、必ずと言ってよいほど題名に「宗教」「神話」などの語が含まれることも、そのような傾向を物語る。思想史学で儀礼研究を推し進めていくのであれば、世俗の儀礼にも十分配慮して聖俗両者を綜合すべきであろう。

末木が「栄西における密教」（報告資料）などを強調することも、宗教儀礼への注目と関連していよう。しかし、儀礼研究者の舩田淳一が「完成された親鸞の「他力本願」思想にとって、儀礼は決して本質的な意味を持ち得ない」[2]と述べたように、すべての思想家が儀礼に深く関わっていたのでない。宗教儀礼や密教に注目すると、これまで「脱呪術」として高く評価されてきた親鸞や道元などは評価し難くなる。ただし、だからと言って儀礼中心の思想史叙述に位置付けるため、それらの思想家を儀礼に付会するようなこともあってはならない。

三、中世は宗教の時代か

末木はぺりかん講座中世巻の「総論」で、「中世には、「冥」の領域のほうが強力で真実の世界であったが、近世になると「顕」の領域が伸長する。さらに近代になると、少なくとも表面の言説の世界からは「冥」の領域は

追放される」（二二頁）との展望を示した。[3] 中世が宗教一色の時代だったとは述べられていないものの、当時における世俗が過小評価されていないかと疑わざるを得ない。

この問題と関連して、両講座の中世研究では朝廷や貴族が十分に位置付けられていない。例えば国文学や歴史学では、和歌物語の註釈や禁裏公家の文庫などについて無視できない研究蓄積があり、資料発掘も活発である。しかし両講座だけでなく、現在の思想史学ではこのような動向への反応が鈍いように見える。

また両講座では、末木の担当した巻に限らず、未来志向の問題意識が強く示されている。岩波講座の「編集にあたって」では、「本講座では、過去の思想と今日とが切り結ぶ問題を設定し、テーマごとにそれぞれの執筆者が論じる。……思想の蓄積を貴重な財産とし、未来にむけた思想を創りだすことができるであろう」（V頁）と述べられており、同じような趣旨はぺりかん講座の「刊行にあたって」にもある。また末木も、ぺりかん講座中世巻の「総論」で「近代が行き詰った今日、改めて中世を読み直すことは、喫緊の課題である」（二六頁）と述べている。

しかし、思想史研究を今日に役立たせるという問題意識は、研究の幅を狭めることにもなりかねない。世俗の時代である近代を克服すべきだという問題意識で中世を研究すれば、宗教の時代としての一面だけが切り取られてしまう。研究者の問題意識は他人に言われて変えるようなものでないであろうが、そういった危険にも注意すべきである。

＊引用文中の傍点は引用者による。

注

（1）このような研究状況については、拙稿「拙著『摂関院政期思想史研究』翼増三章――再び平雅行「破綻論」などに答う」（『論叢アジアの文化と思想』二三、二〇一四、第三章）参照。

（2）船田淳一「中世宗教儀礼研究の射程――神仏をめぐる思想と表現」（序章、書き下ろし）、『神仏と儀礼の中世』法蔵館、二〇一一、二四頁。ただし船田は、だから親鸞を研究しなくてよいと主張しているのでなく、評者も、だから儀礼研究を止めるべきだと主張したいのでない。

（3）末木の用法で「冥」「顕」は、それぞれ「死者を含む了解不可能な他者の領域」「神仏の世界」と「了解可能な人間間」を意味する（ぺりかん講座中世巻「総論」二一頁）。ただし、史料用語と分析概念が混同され

ており従い得ない。

付記　当日は報告で取り上げられる箇所を中心に、末木担当巻を論評した。それ以外は今後俎上に載せられるべきであろう。研究状況が停滞すれば、相互批判は生じ難くなる。両講座の中世研究には事実の誤認や論理の飛躍、陳腐な通念、新奇な仮説なども散見され、それらを検証することなく「今日」「未来」に役立てようとすることは危険である。

なお本稿は、平成廿七年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

（早稲田大学助教）